

Citation: Fedorowicz Z, Chan Shih-Yen E, Dorri M, Nasser M, Newton T, Shi L. Interventions for the management of oral submucous fibrosis. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2008, Issue 4. Art. No.: CD007156. DOI: 10.1002/14651858.CD007156.pub2.

CRG名: Oral Health

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 9 June 2008.

Clib issue No.; N/U: 2008 issue 4; Update

背景: 口腔粘膜下線維症(OSF)は、インド亜大陸と極東地域によく見られる口腔に生じる慢性疾患である。OSFは、口腔の頬粘膜と周囲組織のコラーゲン狭窄帯が漸進的に形成され、重度の開口制限と舌運動制限から、構音障害や嚥下障害をもたらす。

目的: OSFにより生じる開口制限と痛みの管理のための介入効果を評価する。

検索戦略: Cochrane Oral Health Group's Trials Register(2008年7月)、CENTRAL(The Cochrane Library 2008, Issue 2); MEDLINE(1950年から2008年7月)、EMBASE(1980年から2008年7月)、IndMED(2007年11月18日)にて検索した。言語による制限はしなかった。

選択基準: OSFを管理するための外科的治療、全身あるいは局所の投薬、あるいはその他の介入を比較するランダム化比較試験。

データ収集と分析: 2人の著者が、別々に研究の質と選択された研究データの評価をした。意見の相違は、第3の著者と相談して解決した。更なる情報が必要な場合には、研究論文の研究者に連絡をとった。

主な結果: 87の被験者からなる2つの試験が選択された。それは、ステロイドの病変内注射とリコピンの併用療法と、口腔ストレッチ運動と温熱療法とペントキシフィリンの併用療法であった。これらの試験から、本レビューの一次アウトカムとして、信頼性の少ないデータによるものが2つのみ得られた。また、二次アウトカムは得られなかった。

その中の一つの試験のデータは、アウトカムの評価が不適切に定義されており、もう一方の試験は、被験者の大量の脱落により偏りが生じていた。よって、RevManのメタ分析ソフトを用いなかった。介入の害についての報告はなかったが、副作用は、ペントフィリンによる胃の不快感があった。

レビューアの結論: 本レビューで検索された試験は、数が少なく、品質が低いため、口腔粘膜下線維症の管理におけるいかなる介入の効果についても、そのエビデンスは信頼性に乏しいことが示された。

(翻訳 南出 保・監訳 湯浅秀道; JCOHR)

翻訳公開日: 09年2月20日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点があれば、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。